

lebensgroß

——午後の研究室と等身大のドイツ語学習——

大藪正彦

連なるいくつもの山々を越えたその場所，海からの風と湖からの風，そして山々からの風が会うその場所に，その大学はある。その大学，要するに僕の勤務する島根大学にも，ドイツ語の授業がある。学生がドイツ語を選ぶ理由は，結局のところ僕がなぜドイツ語を選んだのかというのと同じくらい，実はよく分からない。何はともあれ，今回の話はとりあえず僕の研究室の風景から始まる。

人の集まる風景が好きだ。だからなのか，この研究室にはいつの間にか学生が集まって来てくれるようになった。もっぱら勉強や談話のスペースとして利用されているけれど，理由は多分どうでもいい。そこに行けば人が集まっているという場所があって，それだけで安心できたり，心ときめいたり，切なくなったり。部屋の真ん中にはゼミ机，そしてその上にはコーヒーと何かしら食べるものがある。なんだか自慢話に聞こえるかも知れないけど，たいした予算ではないし，それでなんとなくみんなが大切にされているという気持ちになってくれたらいいと思う——ちょうど僕の大学時代のゼミがそうであったように。

ちなみに今いちごトッポをかじりながらドイツ語の宿題をやっているのはレイちゃんとエッチャんで，あちらでマニアックな言語学の本を読んでいるのはフランス語学専攻の *habitué* タケヒロだ。ここに集まるのはドイツ語をやっている学生に限らない。「ここに来るととりあえず食うものがあるから」と言ったのはフランス文学専攻のトシユキだった。いろんな言語を勉強している学生が集まるのは楽しい。そして時々ちょっとした“事件”もある。時にはかなしく哀れな事件も。けれどそろそろ本題に入ろう。

せっかくスペースをいただいたので，真面目な場ではあまり書けないようなことを書いてみたいと思う（あ，いや，*Brunnen* が不真面目な場であるというわけでは……）。それは，不真面目な学生のドイツ語学習について不真面目に考える，ということである（もちろん，偉そうに言うことではない）。さて，いきなりだけど，僕の授業では学生が守らなければならない 10 ヶ条がある。絶対に「やってはいけない」10 ヶ条である。

やってはいけないこと 10 ヶ条

- ①真面目に授業を聞く
- ②真面目にノートを取る
- ③真面目に予習をする
- ④真面目に復習をする
- ⑤絶対に授業を欠席しない
- ⑥絶対に授業に遅刻しない
- ⑦絶対に授業を早退しない
- ⑧絶対に居眠りをしない
- ⑨お腹が空いても我慢する
- ⑩のどが渴いても我慢する

真面目に勉強して、好成績を残して、結局1年でドイツ語をやめてしまう学生も素敵だけど、なんとなく、だらだら、“道楽”でドイツ語を続ける人たちのこともきっと僕らは好きだ。後者のやり方は、それはそれでドイツ語上達の秘訣であって、上の10ヶ条は実はその秘訣の秘訣だったりする（かも知れない）。

まあ、とにかく、こんなふうに思ってみるだけで、僕ら——僕らというのはドイツ語教師のことだけど——が時に考えてみるべきこと、工夫してみるべきことが意外に見えてくるのではないだろうか、と思う。僕らはドイツ語教育の戦術（方法論）を論じるとき、無意識のうちに学生が真面目に授業を受けている場合を前提としていないだろうか（もっとも最近はいかに学生を真面目にするかということが論じられる場合も多いけど）。考えてみれば当たり前の話なのだけど、そのような前提のもとでは、ドイツ語の授業は常に *frustrierend* なものでしかあり得ない。このような真面目前提型の授業というのは、少々強引にたとえるならば、監督の考えるチーム戦術や構想が先にあって、それに選手を合致させていくというやり方に似ている。けれど、このような言わばトップダウン方式のやり方は、代表チームレベルであってもそう簡単に実現できるものではない。もしかしたら、中には100%真面目な学生がそろそろ100%真面目な授業もあって、そこでは100%の成果を得ていますという、村上春樹ふうに言えば100%のドイツ語教師もいるかも知れない。でもそんな素晴らしい教師はこれ際放っておこう。きっと100%の成果の後には100%の未来が待っているに違いない。

そこで、100%でない、“等身大” (*lebensgroß*) のドイツ語教育・学習の話になるわけだけど、キーワードを挙げるとこれは“発見的” (*heuristisch*) な性格のものになる。つまり、あらかじめ立てた戦術に沿ってチーム作りを進め、成果を挙げるというものではない。ただし、もちろんまったくの行き当たりばったりというわけでもない。ある程度の知識や準備も必要だし、見立ても必要だ。けれど、実際にチーム作りが動き出して初めて分かる思いがけない弱点があったり、また逆に幸運に出会うこともある。そこには常に“発見”がある。いずれにせよ、教師の方は学生個人との関係の中で生じてくる偶然に余裕を持って対応しなければならないということで、要するに、けっこう難しい。そこで、特に教師が「やっちはいけない」項目として、「㊦一人で頑張る」を加えてしまおう。なあと、ドイツ語の教師は僕だけではない、自分も一つの窓口だというくらいの気持ちで適切どころへつないでいこう、というものである。学生がすべて自分の懐の中にいることを期待して、無意識のうちに学生をコントロールしていたのでは、結局は真面目前提型と大差がない。

さて、ここで舞台は強引に午後の研究室へと戻る。研究室の賑やかさは年によって変動がある。質的にも量的にも。それはそれでおもしろい（そして寂しい）。ある時期のこの *Stammgast* はカズシゲだった。当時この薄いコーヒーを飲みながら、彼の好きな「知の技法」についての話によく耳を傾けていたが、そんな彼の4年生のときの悩みは究極的である。学問を取って大学院に進むか、彼女を取って就職するか。とにもかくにも彼は就職活動などしないまま、4年生の夏休みは語学留学のためドイツへ行ってしまった。けれど、どういう流れだったか、その彼が4年生の秋に就職活動を始めてみたところ、一社目で内定を決めてしまった。詰まるところ、卒業後 T 修館書店の営業を始めた彼は、今年の6月彼女と結婚し、二人大阪で働いている。

これはどういうことなのだろう。教師の方が明確な答えを出せずに、「うーん、分からないなあ」などと言っていると、結局学生の方が自ら成長して先へ先へと行ってしまうということなのか。そしてその後「あの時偉そうなことを言わなくてよかった、彼の方がずっと考えていたんだ」と、はっと思いついてしまう。そうか、教育って「教えないこと」が大切なんだ、などと新たな12条目を加えたくなったりしながら。

さてさて、とりとめのない話もこの辺りで終わりにしなければならない。以上の話のどこまでが本当で、どこからが本当でないか、そう、よく分からない。こんなことを書いてしまって、いろんなところから非難の声が上がるのが目に浮かぶ。けれど、いくつもの山々を越えたこの場所まで、その声は届かない。めでたし、めでたし。

(島根大学助教授)